# 之作品集

6

文藝春秋

五木寛之作品集　6
涙の河をふり返れ

1973年3月20日第1刷

著　者
発行者／樫
発行所／株式会社 文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町3
電話（代表）03-265・1211
印刷所／凸版印刷株式会社
製　函／株式会社加藤製函所
製　本／大口製本印刷株式会社
定価 770円
© 1973 Hiroyuki Itsuki　　Printed in Japan
0393-513060-7384
万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

# 五木寛之作品集第六巻／目次


涙の河をふり返れ　5
怨歌の誕生　51
弔いのバラード　79
われはうたへど　103
深く暗い海　137
人情ブラウン管　175
奇妙な果実　211
ローマ午前零時　239
解説　相倉久人　297

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 涙の河をふり返れ

装幀／養老正也
レタリング／原アート・アクチュアル
表紙・扉カット／エドワルド・ムンク「叫び」より

# 涙の河をふり返れ

〈一九六七年十一月発表〉

# 1

その日、私が黒木鋭介と待ち合わせたのは、〈カリンカ〉という小さな酒場だった。

十一月下旬の初冬の街には、すでに重い夜の気配が漂っていた。強い向い風の中を、私はコートの襟を立てて足早に歩いて行った。〈カリンカ〉は、私が学生時代から行きつけの古い店である。大学の裏門から出て、戸塚のロータリーを過ぎると、左手の露地の奥に木の看板が見える。時代おくれの小さなスタンド・バーで、およそ古臭いロシア風の造りの店だ。

時代おくれなのは、店の造作だけではなかった。ルパシカを着た中年のマスターと、たった一人の店の女の子も、そうだった。両方とも相当の変人で、店が混んでくると、露骨にいやな顔をした。二人とも、客が少なければ少ないほど機嫌がいいように見える。

傾いた扉を押して店内にはいると、マスターが冷い目でこちらを見た。私が口あけの客らしかった。女の子は固く唇を結んだまま、カウンターの中でアイス・ピックを動かしていた。

「さっき黒木という人から、電話がありましたよ」

マスターが抑揚のない声で言った。

「十五分ほどおくれるそうです。待っててくれとか言ってましたがね」

私はうなずいて、カウンターの前に坐った。

「水割りを」

女の子が、黙って私の前に赤いコースターを置いた。

「大学のほうはどうですか」

と、マスターが水割りを作りながらきいた。

「どうって？」

「まだ講師をやってるんでしょう」

「ああ」

「助教授への道はるか、といった所ですな。講師になって何年たつんです？」
「煙草をくれ」
と、私は言った。私はそういった会話が好きではなかった。
「七年ですか」
マスターは水割りを差し出しながら、無感動な調子できいた。囚人の刑期でもきくような、冷い口調だった。そんなところだろう、と私は答え、煙草に火をつけた。
「あと何年ぐらいかかりそうです？　助教授になるまでに」
「わからんな」
「大学の先生も楽じゃないね」
私は黙って水割りのグラスに口をつけた。私は学生時代から十年ちかくこの店に通っていて、この男の扱い方については、かなりよく知っている積りだった。際限のない議論をさけるには、相手の厭味を徹底的に無視してしまうことだ。
「黒木さんというと、誰でしたっけ？」
マスターは今度は違う話を持ち出してきた。
「おれの友達さ。黒木鋭介という」
「黒木鋭介――」
マスターは腕組みして首をひねると、
「待てよ、いちど前にこの店に来たことがある人じゃないのかな」
「三年前の秋だ。もう店を閉めるという時間に、おれと一緒に来たことがある」
「そうだ」
と、彼はうなずいた。痩せて、額のはげあがったこの男は、記憶力だけは悪くなかった。
「思い出しましたよ。例の歌手の水沢忍（みずさわしのぶ）のマネージャーとかいう人でしょう。ほら、研究費流用事件の責任をかぶって研究室を追放されたとかいう――」
「水沢忍のマネージャーがくるの？」
と、横から女の子が口をはさんだ。「あたし、水沢忍の歌、好きよ」
「おれは嫌いだね。はじめの頃は良かったけど、最近は聞く気がしなくなった。歌は相変らずうまいが」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マスターと女の子は、水沢忍のことで口論をはじめた。私は黙って水割りをなめながら、黒木鋭介という奇妙な男の顔を、頭の中に思いうかべた。

店のラジオが、アニタ・オディの歌をやっていた。窓の外では風の音がきこえた。初冬の夜にうらぶれた酒場で聞くアニタ・オディというのも、独特の趣きがあるものだ。私は黒木とは違って、日本の流行歌には興味がなかった。だが、彼が発見して育てあげた水沢忍という歌い手には、関心があった。彼女が三年前にデビューして、たちまち人気歌手の座についた事件の背後には、社会心理学者のはしくれである私も、多少のかかわりあいがあったのだ。だがおそらくそれは、黒木と私以外の誰も知らない事実にちがいない。

〈しかし、今度はどんな用件で会いたいと言って来たのだろう?〉

私は三年ぶりで突然に電話をかけて来た黒木の真意を、はかりかねていた。彼はすでに私たちとは全く別なコースを歩いている人間だった。私にとって、黒木は、何か無気味な世界に破滅を求めて飛び込んだ落伍者のように思われた。

だが、現実的には、万年講師のまま大学の研究室にくすぶっている私よりも、彼のほうがはるかに成功していたと言えるだろう。少なくとも彼は、年間数千万円を稼ぐスター歌手を支配している実力者なのだ。

「おそいですね」

と、マスターが時計を見て言った。

「もう一杯たのむ」

「ダブルにしますか」

「うん」

その時、ドアのきしむ音がした。振り返ってみたが誰も見えなかった。どうやら風のいたずらしかった。

「女の胸に吹く風は——」

と、カウンターの中で女の子がかぼそい声をふるわせて歌った。それは水沢忍が好んで歌う、もの悲しげな歌の一つだった。私は、そんなじめじめした歌が好きではなかった。詞も、メロディーも、あまりにも日本的に貧しすぎ、哀しすぎて、いやな気がするのだった。

「やめろよ、そんな歌——」

と、私は言った。だが女の子は、かすかに目を閉じたまま、いやいやをしながら、震える声で歌い続けた。黒木は、まだ現れなかった。客も私ひとりだけだった。静かな、奇妙な晩だった。

## 2

黒木鋭介は、約束の時間を三十分ほどおくれて、〈カリンカ〉に現れた。

「おくれた」

と、彼はぽつりと呟いて私の隣に坐った。私を待たせた事で、謝りもしなかったし、言い訳もしなかった。そんな男だった。私は彼のそんな所が気に入っていた。だが、彼をよく知らないほとんどの連中からは、黒木鋭介のそんな態度が歌い手のマネージャーらしくない傲慢さと見られていたようだ。

〈人気歌手を操る陰の男〉などという週刊誌の見出しを、電車の中吊り広告で見かけたこともある。

「しばらくだな」

と、私は言った。「仕事のほうはどうだ。うまく行ってるかね」

「お蔭でな」

彼は目をあげて私をみつめ、言外の意味をこめてうなずいた。「あんたのアドバイスが役にたった。あの子が何とかここまで来られたのは、あんたのあの名プランのせいだと思ってる」

「そんなことはないさ」

私は首を振って笑った。だが、彼にそんなふうに言われることは、決して悪い気持ではなかった。私は少し饒舌になる自分を感じた。

「おれは歌謡曲はわからんし、君たちの世界に関心もない。ただ、マス・カルチュアについてのおれの分析が、現実にどれだけ当てはまるかを知りたかっただけだ。いわば三文学者の自己満足みたいなものかも知れん。いずれにしても、おれはあの時ほんの片棒をかついだだけさ」

「あんたはいい学者になるだろう」

黒木は立ちあがって、枯葉色の軽そうなコートを脱ぎ、

壁にかけた。昔から身だしなみのいい男だったが、今もそうだった。地味なトラディショナルの仕立てのいいスーツをさりげなく着こなし、白のドレス・シャツに黒いシルクの編みタイを結んでいる。少しゆる目に結んでいるタイのあたりに、わずかに彼の住んでいる世界の匂いがした。喋り方や、動作には一種の抑制があって、崩れた感じがなかった。やや長目の髪の下に、どこか知的な翳りをおびた暗い目があった。頬の削げた蒼白な顔といい、いくぶん猫背の長身といい、私よりはるかに研究室にふさわしい男に見える。

彼の学生時代のことを、私は余り知らなかった。同じ文科系の大学院にいても、彼は国文学が専門だったし、私は心理学の教室にいたからである。

黒木鋭介との出会いは、私が江戸時代の〈おかげまいり〉について調べていた時、友人の紹介で彼の所へ資料を借りに行ったのがきっかけだった。〈おかげまいり〉とは、十七世紀末頃から十九世紀までの間に、およそ六十年ほどの周期で大流行した一種のマス・ヒステリア現象である。その背景にあったのは庶民の〈お伊勢様信仰〉だが、その最大のピークには日本全土から約四百九十万人が家郷をはなれて伊勢詣でにさまよい出たといわれている。封建社会における自然発生的な宗教的集団行動として、社会病理学の研究対象に用いられることがしばしばあった。

私は、黒木鋭介に〈伊勢道中歌〉に関する資料を借りた。私から見ると、黒木という青年学徒は、何かくすぶり続けている導火線を抱いた孤独な男のように見えた。

黒木鋭介が大学の研究室を追われたのは、彼が私と知り合って間もなくの事だった。私はその間のくわしい事情を知らない。ただ私が個人的に聞いた噂では、彼は指導教授である高名な国文学者、羽根崎精吾が研究費流用問題に問われたとき、進んでその責任をかぶったのだという話だった。

その事件の内容や、経過について、関係者たちは石のように口をつぐんでいた。そして私たちは、一人の暗い目をした学生が、アカデミズムの世界から去って行くのを見ただけだった。

その頃、私は黒木鋭介から、E・H・ノーマンの〈ク

リオの顔〉〈甲子夜話続篇〉など、〈おかげまいり〉に関する数冊の資料を借りたままになっていた。私はその本を返すために、彼の自宅を訪ねた。その日の事は、なぜかいやにはっきりと私の記憶に残っている。

それは乾いた夏の日の午後だった。私は電車を川崎駅で降りて、事務局で調べた黒木の住所を徒歩で探した。

私鉄の踏切を渡り、右の方へ歩いて行くと奇妙な建物の並んでいる一画に出る。その街が、かつての赤線地帯である事は、私にもわかった。いまは転業して、旅館や、安食堂や、小料理屋が軒をつらねている。

ひどく暑い日だった。ただの暑さではなく、毛穴からじわじわと汗が滲み出る不快なむし暑さだった。遠くで砲声のような雷鳴がきこえた。夕立ちでも来そうな気配が、あたりの熱気にあった。黒木の自宅は、なかなか見つからなかった。その番地には、数軒の酒場と、小料理屋があるだけだった。しばらく歩くと、〈花むら〉と看板の出ている小料理屋の店先に、スカートから太腿をむき出しにして坐っている若い女がいた。私は出来るだけ鄭重な口調で、黒木鋭介という学生の家をたずねた。

「黒木鋭介？　ああ、鋭介さんの家ならここだけど」

若い女は、全く日に焼けていない白い太腿を、掌で隠すようにして、首をかしげた。私は思わず確めるように目の前の安っぽい小料理屋を眺めた。

「あの、大学の研究室におられた黒木君なんですが」

「変なひと」

と、若い女は言った。

「だから言ってるじゃない。黒木鋭介でしょう？　うちのおかあさんの弟よ。裏の離れにいるはずだわ」

こういった世界で、女経営者のことを〈おかあさん〉と呼ぶ習慣を、私は知らなかった。私は奇妙な混乱を感じながら、〈花むら〉の店にはいっていった。店内は低いつい立てで仕切った座敷になっており、カウンター越しに調理場が見えた。店内はがらんとして、人気がなかった。かすかな脂粉の匂いを私はかいだ。座敷から二階へ通ずる階段が見え、その段の上に、赤い腰紐が刺戟的な感じで落ちていた。

「ごめんください」

私は奥へ向って大声をはりあげた。返事はなかった。私はもう一度、呼んでみた。

「だあれ？」

二階の方から女の声が返ってきた。黒木鋭介君の家はここか、と私はたずねた。

「鋭介さんに何の用？」

声といっしょに、階段の上の方から、白い女の足が降りて来た。

しどけなく浴衣を着た色の白い女だった。額が汗にぬれ、幾筋かの髪の毛が肌にはりついているのが、ひどくセクシュアルな印象をあたえた。彼女は痩せぎすの体をやや斜に構えて、光る目で私を見つめた。

「あなた、どなた？」

「大学の研究室にいる木島という者です」

と私は言った。

「大学？」

不意に女の顔付きが変った。

「帰ってよ」

と、その女は斬りつけるような鋭い声で言った。

「大学がいまごろ鋭介に何の用があるの。恥知らず！」

私は驚いてぽんやり突ったっていた。女の目が、動物のような憎悪をこめて私を見すえた。

鋭介が姿を見せたのは、その時だった。階段の上から、上半身裸のまま、彼は物憂げな動作で降りて来た。私を見て、少し意外そうな表情をしたが、すぐむっつりした顔にもどって、ぽつりと言った。

「あんたか。あがれよ」

女が何か言おうとした。鋭介はうるさそうに手を振ると、

「何か冷いものでも出してくれないか」

「だって——」

「いいから」

と、鋭介は言った。そして私にうなずくと目顔で、上れ、と合図をした。私は靴をぬいで、彼の後について階段をあがった。

鋭介の部屋は、二階の端にあった。そこには夜具がしきっぱなしになっており、かすかに女の匂いがした。

私は風呂敷包みから本を取り出し、礼を言って彼の前

においた。
「この本は返してもらわなくてもいい」
と、鋭介は言った。
「あんたが使ってくれ。おれにはもう本はいらんのだ。ほら――」
鋭介は壁際の大きな書棚を振り返って、静かな声で言った。
「本は全部、売ってしまった」
私は黙っていた。庭の方でせみの金属質の鳴き声が続いていた。半分ほどめくれている夜具のシーツの上に、松葉のように数本のヘアピンが落ちているのが見えた。
これからどうする気か、と私はたずねようとした。だが、それを聞いたところで何になるだろうという気がして、たずねるのをやめた。私たちは、しばらく黙って窓の外の夏空を見ていた。女は姿を見せなかった。
「それじゃ」
と、私は言って、立ち上った。鋭介は本を私の方へ押しやり、ちらと微笑して私を見た。その時、ほんの一瞬だけ鋭介の暗い目にうかんだ微笑が、その記憶に残った。
私はその本を風呂敷に包んで、その家を出た。
駅についた頃に、激しい夕立ちが来た。ホームに白くしぶく飛沫を眺めながら、私はぼんやりと鋭介の事を考えていた。あの女が彼の姉だとは思えなかった。だが、やがて電車がはいって来て、私は考えるのをやめた。鋭介は私にとって直接関係のない人間だった。彼と私とは、すでに住んでいる世界がちがってしまっているのだった。
私が黒木鋭介と再会したのは、それから数年後の秋だった。
私はすでにその時、大学講師の肩書きを持って学生たちを教えていた。鋭介は研究室に偽名で電話をかけて来て、私に会いたいと言って来たのである。私はその日の夜、同じこの〈カリンカ〉で彼と会った。
鋭介はその時も、今と同じように無口で、暗い目をしていた。だが、彼の表情には、前に川崎の小料理屋の二階で会った時とは別の、一種の精気のようなものが感じられた。
「ちょっとあんたに知恵を借りたいと思ってね」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com